

【2020年度 明治大学阿部英雄研究奨励金実施報告書】

※ 所属・学年は2020年度のものであります。

ふりがな 氏名	たけした はるな 竹下 春奈	所 属	文学部史学地理学科考古学専攻4年
研究課題	土器附着炭化物の同位体分析からみた縄文時代後期の土器機能及び生業活動		
【申請内容】 <p>申請者の最終目的は、縄文時代後期中葉に「精製土器と粗製土器」の分化及び作り分けが見られる前後で、土器機能及び生業活動に何があったのかを明らかにすることである。そのため、東京都向方南遺跡出土の土器附着炭化物を安定同位体分析にかけ、考古学的研究と併せて検証を行った。</p> <p>研究課題の設定理由として、「精製土器と粗製土器」の研究史上の解釈が現在、大きく2つに分かれていることが挙げられる。1つ目はそれぞれを祭祀用具と日常的容器の違いと捉える説だが、精製土器は深鉢を圧倒的主体とするため、生活容器としての組み合わせに不足が生じるなど幾つかの矛盾点がある。そして、2つ目は、食物加工工程の分立による土器の使い分けとする説である。煮沸容器群が持つ多様な形態を、初期的加工(アク抜きなど)→調理加工(茹で、蒸し、煮込みなど)という食物加工工程を通して生まれたものと捉えている。そこで、本研究では2つ目を視座にし、その解明と検証にも取り組んだ。</p> <p>また、2020年4月時点での申請内容としては、縄文時代中～後晩期の東京湾沿岸の貝塚とし、上記の研究を通して、当該地域の「粗製・精製土器の分化現象」及び「水産資源の利用形態」の解明を目指していた。しかし、2020年7月まで行った資料調査の結果として、東京湾沿岸の貝塚出土の縄文時代中～後晩期の資料が充分量に達しなかったため、2020年9月頃に計画を変更し、上記の研究課題に定めた次第である。申請時点での研究対象地域である東京湾沿岸の貝塚から、武蔵野台地上の遺跡である向方南遺跡へと変えたものの、「粗製・精製土器の分化現象」解明という研究課題は継続し、更に生業活動を対象に加えた形となった。</p>			
【研究方法】 <p>本申請研究を遂行するにあたり、2020年度を通して、以下の事柄に取り組んだ。</p> <p>①向方南遺跡の土器型式研究、②向方南遺跡の土器出土傾向の分析、 ③土器附着炭化物の資料調査(各博物館に訪問)、④土器附着炭化物の安定同位体分析及び前処理</p>			
【実施内容】 <p>①・② 向方南遺跡の土器型式研究、土器出土傾向の分析 2020年4月-2021年1月にかけて実施</p> <p>③・④ 土器附着炭化物の資料調査、安定同位体分析及び前処理 2020年6-7月 明治大学博物館での資料調査 2020年7月 北区飛鳥山博物館での資料調査 2020年9月 東京大学総合研究博物館での前処理 2020年10-11月 東京大学総合研究博物館での安定同位体分析</p>			
【研究結果】 <p>分析対象遺跡である向方南遺跡では、縄文時代後期の加曾利 B 式期に入ると集落域の主体が A・B 地点へと移行するが、そのうち、A 地点で粗製深鉢の集中が見られている。また、分析結果では、粗製土器での調理物の中心は植物質の陸上資源となっており、その内訳は C3 植物に加え、一部で堅果類やイモ類由来のものが存在していた。</p> <p>▶ 土器機能</p> <p>以上より、土器集中地点での粗製土器の利用方法を一般的な堅果類のアク抜きなどと想定する場合、安定同位体分析結果は出土地点が違うものの、仮定と矛盾はしていない。そのことから、向方南遺跡における粗製土器の集中が、低湿地の水場遺構における粗製土器の利用と関連性を持つ可能性は充分高いと考えられた。精製土器と粗製土器の使い分けがあったかは断定できないが、遺跡内における分布の集</p>			

中地点に違いがあり、かつ付着炭化物の由来する食物の傾向に違いがあることから、そこに調理食物の意図的な選別があった可能性は考えられる。関東地方の縄文時代後期の遺跡である埼玉県大木戸遺跡でも、同様の傾向が見られたものの、精製土器と粗製土器の使い分けに関しては本遺跡の結果からは断定できなかったため、今後も様々な遺跡のサンプルを増やし、更なる検討を行っていく必要がある。

▶ **生業活動**

また、当時の生業活動としては、向方南遺跡において土器製作が活発に行われていた時期であり、分析結果から、土器を用いて、主に C3 植物と草食動物を主体として調理をしていたと考えられる。本遺跡で土器を製作・廃棄した集団は C3 植物の採集に加え、一部、堅果類やイモ類の採集も行い調理していた可能性がある。ただ、その採集対象に、雑穀類を始めとする C4 植物は採集されていたかどうかは推測できないが、土器を用いて C4 植物の調理をしていた可能性は低い。

▶ **今後の課題**

本研究で明らかになった課題は主に 2 つある。1 つは、向方南遺跡は近辺に河川が流れる状況下であるが、水産資源由来の資料の点数は少ない。そのため、淡水魚の利用に関する基礎データを今後増やし、淡水魚の証拠を示す標識を確立することで、漁猟活動について考察する必要性が高い。2 つ目は、堀之内式よりも加曽利 B 式で窒素同位体比が高い傾向の背景を、調理方法や目的の変化によるものと仮定すると、内面付着炭化物に対して外面付着炭化物と同じ還元炎による高温の熱分解を加えるという調理方法を選択した目的こそが次研究の課題と言える。

【研究報告】

本申請研究は卒業論文として提出し、その成果は以下の形で還元する。

1点目は、申請者所属の明治大学考古学専攻において、人文科学分野である考古学と自然科学分野である安定同位体分析を併せて行った学際的研究であり、数少ない先行研究となり得る。本卒業研究以前には、先行例には先駆的な1例のみとなっており、それに続く研究として本卒業研究は重要な意味を為す。今後、考古学専攻において新たな学際的研究を志す後輩にとっての礎となり、更に発展させる一助となることを期待している。

2点目は、本大学で4年間考古学を学んだ成果として本申請研究を修め、本学大学院に進学し、隣接学問である博物館学の研究で活かしていく。博士前期課程での研究テーマは、埋蔵文化財の活用を主軸に据えており、2年後修士論文として成果報告される。

最後に、本卒業論文は、向方南遺跡の資料提供元である杉並区教育委員会へ提出を行った。行政組織における埋蔵文化財の研究活用例として報告される予定である。

ふりがな 氏名	にゅう しょう 牛 瀟	所属	大学院文学研究科史学専攻アジア史専修博士後期課程2年
研究課題	元代の儒教発展と地域社会－曲阜碑刻を中心とする研究－		

【研究目的】

日本では「モンゴル帝国史」の研究が盛んであり、杉山正明・宮紀子等が「大元ウルス」という視点から、中央ユーラシアや中国における遊牧民による王朝の歴史を多くの点で見直してきた。近年、岡田英弘や杉山正明の著作は中国語に翻訳され、元朝と他の中国王朝との関係や、東アジアの近代化や政治問題なども含めて、議論や批判を多く受けている。

以上の先行研究を踏まえて、本研究は元朝の都である大都（現在の北京）にある王宮（政治の正統）と並び存在していた山東曲阜の孔子廟（学問の正統）を中心として、統治者の儒教政策と儒教の発展をテーマとする。中国山東地域に現存している基本資料の整理と補充をし、曲阜の各地に点在する石刻の拓本（写真）資料を収集し、分類・解説する。元代の儒教発展状況を明らかにした上で、当時の社会構造、政治や文化の形態を検討する。

【実施内容】

①中国で石刻拓本資料の収集

a.山東地域の石刻拓本の収集

曲阜地域の石刻は、刊行物で整理されたもののほかに、未整理の石刻が多く存在する。その整理調査の状況を押さえるために、『曲阜元碑集録』（曲阜師範大学孔子研究所、1981年）を購入した。また、新たに出版された『曲阜儒家碑刻文献輯録』3輯・4輯・5輯（齊魯書社、2015～2019年）も収集した。そのほか、曲阜地域に隣接する鄒城市にある孟子廟の中にも多くの石刻が存在しているが、これについて『鄒城碑刻』（上、下、山東省鄒城市政協編、2012年）、『孟廟孟府孟林碑刻集』（齊魯書社、2000年）の石刻資料を収集した。

曲阜地域の周辺には泰山、嶗山などの名勝地があり、曲阜に石刻を立てた元代の官僚や知識人の名前や情報などは、周辺地域に残された石刻から確認できる。そのため、『嶗山碑碣與刻石』、『東鎮沂山碑拓集錦』、『泰山石刻大全』も収集した。さらに、山東地域は全真道教が発展した地域であり、孔子廟で活躍した人物の中には同地域の全真道教の宮觀で確認できる者もいるため、『金元全真道碑刻集萃』、『山東道教碑刻集』（博山卷、臨朐卷、博山昌樂卷）を購入した。

b.モンゴル草原地域の石刻拓本の収集

山東地域は、モンゴル朝廷の姻族であるコンギラト氏族の分封地であるため、山東地域の石刻と内モンゴル赤峰市の石刻、元代大都である北京の石刻をさらに比較分析する必要があると考えられる。申請者は2019年の調査・研究で、王族と孔子廟の関係を調べるため、『赤峰市地方志・金石志（初稿）』、『草原金石録』、『北国石刻与華夷史跡』、『遼南碑刻』を収集した。

c.華北における山東近辺地域の石刻拓本の収集

元代に大都と呼ばれた北京には国子監や孔子廟が存在し、山東地域の孔子廟・学校の石刻と強く関連している。それらの石刻を調べた上で、『北京遼金元拓片集』『北京元代史跡図志』『北京大学図書館新藏金石拓本菁華（続編）』、『北京大学図書館蔵歴代石刻拓本草目』を収集した。元代初期に活躍していた山東地域の儒者の官僚や知識人は、河北・河南・江蘇地域の一部と強いつながりがあった可能性が申請者の2019年の調査から明らかになった。そのため、『河北柏郷金石録』、『衛輝歴代碑刻』、『海河流域歴代水利碑文選』、『南京歴代碑刻集成』などの碑刻拓本書も収集した。



石刻拓本の調査範囲示図（譚其驤『簡明中国歴史地図集』元代部分、中国地図出版社、1991年）による報告者作成

②日本や台湾で所蔵されている山東石刻拓本の収集

以上で収集した石刻の拓本以外に、文物調査や電子データベースによって公開された一部の墓志銘の資料が存在する。大多数の拓本は自由に閲覧することができるため、今回は資料の保存が少なく、元代初期に戦乱が起こされた山東地域の状況を把握するために、台湾に所蔵されている元代初期の孔子子孫の墓志銘の電子画像を購入した。また、台湾『中央研究院歴史語言研究所蔵元代石刻拓本目録』等、日本で石刻関連研究の研究書をも購入した。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2021年度段階での現地調査の実施は困難であるが、刊行物や電子データで公開された石刻の写真や拓本資料によって原物の状態を確認することができるため、現地へ行かず石刻拓本集を収集した。広範囲わたる資料の収集・整理ができた。これら石刻拓本集の収集や整理による基づいて申請者の研究結果は以下である。

【研究結果】

①山東曲阜地域碑刻の整理

曲阜の碑刻を網羅的に整理した成果『石頭の儒家文獻—曲阜碑文録』(齊魯書社、2001)について、元史研究者の森田憲司は多くの誤りを指摘している(「曲阜地域の元代石刻群をめぐって」『奈良史学』19号、奈良大学史学会、2001)。申請者は森田が編纂した目録を参照し、改めて目録を作った。そこから、これまでの刊行物は碑刻の裏面の文字や碑の形・位置などが収録されていない場合が多いことが分かった。今回の研究奨励金で購入した山東曲阜地域の碑刻拓本を参照する上で、整理が不足している部分を確認し、誤記や誤読を直して、改めて碑文を読み取り、博士論文で公開する。

また、整理した石刻の中で特に重要であると申請者が考えたものを選び『明大アジア史論集』26号で紹介・公開する予定である。

②華北地域における社会構造・政治と儒教に関する研究

a. 地方衙門と孔子廟

山東肅政廉訪司は朝廷を代表する地方衙門を監督する儒教制度の機関であり、しかし、モンゴル人による政権下、それが地方衙門と孔氏一族と協力して、儒教制度を推進していたことが山東地域石刻拓本の整理や校正からわかった。曲阜で多くの碑刻(50余個)を残した。中国で長く存在していた監察制度の変容、また、元の監察機構・地方衙門と家族の関係を分析する。この研究内容「元代の監察官僚と儒教尊崇—山東肅政廉訪司官の題名と関連碑刻を中心として—」は5月に『駿台史学』173号への投稿を予定している。

b. 地方宗族と孔子廟

日本や台湾で所蔵されている墓志銘、先塋碑の資料を利用して元代の地方宗族について検討する。孔子・孟子の子孫などの大家族が有力者として活動していた曲阜において、彼らが孔子廟や学校をめぐる元代の朝廷、役所との交渉や在地の大家族の変化を明らかにする。本研究内容は2021年度に関連学会の機関誌に投稿する予定である。

③元代の儒教に関する研究と博士論文の執筆

太宗～順帝の命令碑刻を分析し、国家祭祀である曲阜の孔子廟祭祀に関して、朝廷からの使者・儀式・地方の参与者・影響等の角度から、各モンゴル皇帝の対儒教姿勢を分析する。また、曲阜に立てられた、皇帝とは異なる部族出身の皇太后・駙馬・公主による命令碑刻と比較し、皇帝と皇太后一族の権力の比較から、元代における宮廷内での政治と儒教発展の関係を論じる。本研究内容は査読誌へ投稿の上、博士論文の中核となる見込みである。

④データ整理と未利用の石刻についての整理・紹介

今回収集した山東地域の石刻拓本を利用して、電子データで石刻の集計や分類を行う。元代における北京・河北、江蘇など中国の各地域に存在する孔子廟・学校・書院をめぐる地域間での人物の活動や、官僚・有力者の名前が多く記録された重要な石刻を整理し、調査研究の成果として雑誌に公開する。